

富野幹雄・住田育法編著

『ブラジル学を学ぶ人のために』

世界思想社 2002年 viii+235ページ

こんた りょうへい
近田亮平

本書は、ブラジルをひとつの地域ないし社会と見なし、さまざまな視点から同国を総合的に理解しようとする人たちに向けられた書である。「ブラジル学」という言葉はあまり聞き慣れないかもしれないが、序章「ブラジル学への招待」で定義されているように、「社会学や歴史学、経済学など人文・社会科学のさまざまな専門分野間の学際的な協力作業を強く意識して、ブラジルの総合的な研究を目指す学問」のことを意味しており、過去にも同じように「ブラジル学」を追究した本が出版されている^(注)。しかし本書は、専門分野の異なる複数の日本のブラジル研究者が、それぞれの立場から「ブラジル学」を論じた初めての試みであり、画期的な書であると言える。

本書は「開発」をキーワードに、開発と社会の関係を扱った第1部と文化との関係を扱った第2部の2つに大別され、それぞれが4つの章から構成されている。第1部「開発と社会」はブラジルの環境、経済、人種、労働力移動について論じている。第1章「開発と環境保護への取り組み」(小池洋一)は、ブラジルにおける環境の悪化・破壊は開発の結果であるが、長い開発の時代を経て、開発の環境への調和を目指す時代を迎えていると主張している。第2章「ブラジル経済——基本問題と今後の課題——」(西島章次)は、戦後のブラジル経済の特質と変遷をまとめ、経済自由化の中で政府の果たす役割の重要性を指摘している。第3章「人種問題」(富野幹雄)は、「人種民主主義」という言説によって曖昧にされてきたブラジルの人種差別の問題を明らかにし、建前と実態が乖離しているブラジル人の人種観について考察を行っている。第4章「ブラジルにおける労働力移動——サン・パウロのコーヒー経済と移民労働——」(布留川正博)は、ブラジルの多民族社会の形成過程を労働力移動、特にコーヒー産業の興隆に起因する外国移民の流入という観点から論

『アジア経済』XLIII-11 (2002.11)

じている。

第2部「開発と文化」はブラジルの政治、教育、映画、言語について論じている。第5章「ブラジルの政治文化」(住田育法)は、ヴァルガス革命以降の政治の変遷を概観し、民主主義の進展とともに国民の側に明らかな意識改革が生まれつつあると主張している。第6章「グローバル時代のブラジルの教育」(野元弘幸)は、ブラジルの教育制度や問題点、日本に在住する日系ブラジル人の教育の現状を明らかにし、パウロ・フレイレの思想に根ざしたブラジルの教育の特色について述べている。第7章「ブラジルの映画」(住田育法)は、発展途上のブラジル社会の現実を映し出した「新しい映画」を中心にブラジルの映画史とその魅力について述べ、多くの優れた監督とその作品を紹介している。第8章「ブラジルの言語」(黒澤直俊)は、ポルトガル語と先住民語を中心に、ブラジルに存在する多くの諸言語の歴史と特徴について詳細な説明を行っている。

また、最後の付論「ブラジルと日本人／日系人——ブラジルに渡った日本人と日本に向かう日系人——」(伊藤秋仁)は、ブラジルの日本移民の歴史と在日ブラジル人のデカセギ現象についてまとめている。さらに、第2部には「ブラジルの大学」、「ブラジルの音楽」、「マシャード・デ・アシス——ブラジル文学への誘い——」、「ブラジル移民の出身県」というコラムが掲載されている。

本書の問題点として、キーワードである「開発」との関連性が明確ではなく、問題の紹介や説明に止まっているところがあること、また、僅かではあるが事実とは異なる記載があることを指摘することができる。しかし、ブラジルについての基本的な知識の紹介と実態の解明を試みた本書は、ブラジル、特に同国の開発の問題を地域研究的アプローチから捉えようとする人たちにとって、必読入門書であると言える。

(注) 中隅哲郎『ブラジル学入門』無明舎出版 1994年／田所清克『ブラジル学への誘い——その民族と文化の原点を求めて——』世界思想社 2001年など。

(アジア経済研究所地域研究第2部)